

「自己調整力」の育成を中核に据えた学校経営の工夫と職員参画の在り方
～健康ウィークの取組が促した、組織運営に対する職員の関与性の追求～

藤本 優（学校経営コース）

1 はじめに

自身がこれまで体育主任という立場で関わっていた「健康ウィーク」の取組を通して、児童の生活習慣やメディア利用（メディアコントロール）に対する意識改善の必要性を実感したことが動機である。しかし、その課題解決を各部門単独の取組で達成するには限界があり、学校組織全体での対応の必要性を感じ、そのアプローチ方法を探索・検討していくこととした。

2 健康ウィーク発の課題発見とその解決策

5年前から中学校区3校（五十嵐中・真砂小・五十嵐小）での小中連携事業として「健康ウィーク」の取組を行ってきた。この取組は、子どもたちの普段の生活習慣を見直したり、より良い生活習慣について考えたりするきっかけとなるように、各校の養護教諭や体育主任が中心となり、立ち上げた取組である。以下はその概要とねらいである。

【概要】

- 平成28年度から、「五十嵐中学校区 健康ウィーク」として、三校一斉の生活習慣チェックを年2回、全校児童・生徒を対象に実施。
- 「就寝・起床時刻」「メディア（テレビ・ゲーム・インターネット・携帯等）利用時間」「バランスの良い朝食摂取」「30分以上の適度な運動」について各家庭で1週間チェックを行う。

【ねらい】

- 生活習慣チェックを実施することにより、特に「早寝・早起・朝ご飯・メディア利用」について意識した、より良い基本的な生活習慣が身に付くようにする。
- 五十嵐中学校区の三校合同で行う小中連携事業の保健・体力部門で、生活について同一課題に取り組むことで、小中で一貫、継続した生活習慣への意識付けと取組の継続を図る。

上記の取組を通して見えた児童の課題解決には、健康ウィーク自体の実践上の課題と、それを支える組織運営上の課題という2つの側面が存在すると考えた。

- (1) 健康ウィークにおける課題
生活習慣チェック5項目の中でも、「メディア

利用時間」の増加に伴う学校生活への影響が年々顕著になってきていることが大きな課題としてクローズアップされた。

① 学校生活への影響

課題として挙げられた児童のメディア利用時間の増加が、以下のような学校生活の多方面に悪影響を及ぼしている可能性が示唆された。

- ・授業中、寝ていたり集中できなかったりする学力不振
- ・SNSを中心とする友人トラブル
- ・良質な睡眠が確保されない健康面への悪影響

② 取組内容改善に向けた方向性

年2回の取組を一過性のものとせず、いかに日常化に繋げることができのるか、そしてその取組を児童が主体的に進めることができるのが取組改善のポイントと捉えた。

(2) 組織運営における課題

「健康ウィーク」における改善事項は、健やか部会単独の改善に向けたアプローチだけでなく、その他の部も含めたビジョン部全体からのアプローチの必要性を実感し、そのためのビジョン部活動の在り方を追究していくこととした。

(3) 研究の目的・内容と方法

①目的・内容

本研究は、「児童が主体的に自己の生活を見直し、改善することができる資質を育む」ことを目標として設定した。また、組織運営の面から教育ビジョンにおける取組を円滑また効果的に進めるための各ビジョン部の連携の在り方や部内における取組の充実を図るための有効な手立てを探っていく。

②方法

【実践上の課題に対して】

- ・これまでの健康ウィークの取組における成果と課題を明確にし、今後の取組の在り方を明らかにしていく。
- ・子どもの実態をもとにしたメディアコントロールの必要性の再確認と、その課題解決に向けた取組の方向性を明らかにしていく。

【組織運営に対して】

- ・学校組織運営における課題の整理と、その改善に向けた方策を管理職や他の職員と協

働して検討する。

- ・校内組織内のビジョン部について、その位置付けと機能的な活動の在り方について検討していく。

【その他】

- ・中学校区3校連携事業として行っている健康ウィークの取組自体の在り方を校内だけでなく、地域や保護者と一緒に考え、課題解決に向けた方向性を明らかにしていく。

3 「健康ウィーク」と「組織運営」の両面から課題解決を図った一年次実践

課題解決に向けて、一年次は「健康ウィークの内容改善」と「組織運営の改善」という両面からのアプローチを試みた。

(1) 健康ウィークの内容改善

これまでの取組をもとに児童の意識改善を図るために以下の取組を行った。

① アンケートで児童の意識を見取る

これまでの実態から健康ウィーク期間中と日常のメディア利用の様子に大きな違いがあることが予想されたため、メディア利用に関する振り返りアンケートを実施した。その結果、児童のメディアコントロールに対する意識は期間中高いものの、その意識は日常化に至っていないということが明らかになった。

② 個に応じた働きかけによる意識改善

取組目標を達成できていない児童に対して、学級担任の協力を得て、個別かつ丁寧な対応を行ったことが、メディアコントロールに対する意識改善につながったものと考えている。その結果、健康ウィーク期間中に関してはメディアコントロールに対する意識改善に効果が認められ、改善が図られた。

(2) 組織運営の改善

これまで自校では3つのビジョン部(確かな学力向上部・豊かな心の育成部・健やかな体の育成部)が組織され、それぞれの部で課題解決に向けた活動が展開されていた。

① ビジョン部単独での課題解決の限界

健やかな体の育成部で実施してきた健康ウィークの取組は、児童の生活習慣改善が大きなテーマである。しかし、その改善を図る過程で部内だけの取組では課題解決の限界を感じた。そこで、他の部との連携・協力した取組を推進することの必要性を強く感じた。

② ビジョン部活動を繋げる組織設立

健康ウィーク発の課題解決に向けて、部内だけ

でその方策を考えるのではなく、3つのビジョン部が連携・協力した取組を実践することが必要だと考えた。そこで、各ビジョン主任と主幹教諭を中心にしたビジョン主任会の設立を管理職に提案し、10月からその組織の運用の開始に繋がった。

(3) 成果と課題

【内容改善】

健康ウィーク中の取組では、児童のメディア利用時間の減少に一定の効果があつたが、取組の継続や意識の持続には課題が残った。また、児童への個別の働きかけだけでなく、家庭と連携した取組の必要性も明らかになった。

【組織運営】

各部の運営に関する悩みや問題点を共有することができた。一方で各主任から出された意見や要望を学校運営にどのように反映できるのか、具体的な検討が必要であることが浮き彫りとなった。

(4) 自身の気付き

一年次実践を振り返る中で、自身の意識が健やかな育成部の枠から抜け出せていないこと、また管理職や他の職員に対して自身の思いや、考えをうまく伝えられていないことに大きな課題があると感じた。そのことは、自身が一職員として、学校運営にどのように参画していけるのか、という組織運営への関与性という新たな視点に着目するきっかけとなった。

4 課題の再検討と焦点化を図った二年次実践

一年次、メディアコントロールに対する児童の意識付けを自身の探究課題の中心として考えてきたが、健康ウィークを通して見えてきた児童の実態や意識の変化、またビジョン主任会を通して校内組織運営に参画してきた一年次実践の成果として、「自己調整力」の育成の必要性が仮説として浮かび上がってきた。

(1) 自己調整力に辿り着いた過程

「自己調整力」については、昨年度受講した「特色ある教育課程の事例研究」の課題として取り組んだ教育ビジョン作成の際に、その力を中核として教育活動を展開することで自他とのかかわりを大切にした教育活動を通して自校の教育目標である「未来を創りだす子ども」の育成に繋がるのではないかと考えてきた。そのことと、課題研究の中で自身が大きな課題として考えてきた児童のメディアコントロールの定着に必要な資質・能力として「自己調整力」の育成に関連があると考え、その育成に向けた取組を推進することに辿り着いた。

(2) 「自己調整力」で繋がるビジョン部活動

自己調整力の育成という切り口から健康ウィークの取組を見直すことで、他のビジョン部との繋がりがや関わりを再考することができるのではないかと考えた。また、この力を高めることは今年度から完全実施となった新学習指導要領の中で育成すべき資質・能力と大きく関わっており、これからの予測不可能な社会の変化の中で生きていく子どもたちに必要な力だと言える。

5 「自己調整力」の育成を中核にした教育活動と自身の関与

自己調整力の育成を中核に教育活動を見直すことで、これまで関連性を見出すことが出来なかった各ビジョン部活動に繋がりが生まれ、自身の組織運営への関与も積極性を増すこととなった。

(1) 管理職への提案から考えた行動計画

校長や教頭、主幹教諭との面談を通して、管理職が考える学校組織運営に関する課題やそれを受けての推進方法や方向性と、自身が考える方向性を擦り合わせながら今後の組織運営の方針を関連させていくことが必要だと考えた。また、管理職の意向を受けた上で、お互いの意見を擦り合わせたことをもとに、「自己調整力」を切り口に各ビジョン部の取組を再考することが必要だと考え、具体的に取り組むこととした。

(2) ビジョン主任会での合意形成

主任会における自身の提案に対し、自己調整力をキーワードに各部の活動を再考することや、児童に身に付けさせたい資質・能力として価値あるものではないかという認識については、概ね賛同を得られた。但し、全教職員が、その力を児童に身に付けさせるために何をしたら良いのか、身に付けた姿をどのように見取ることができるのか、などまだ疑問を抱える職員もいることがうかがえた。そのことを踏まえて、主幹教諭の協力を得ながら、それぞれのビジョン部重点活動実施に当たって、計画や実施方法を協働しながら考えていく必要があると感じた。

(3) ビジョン部活動への自身の関与

各ビジョン部で自己調整力の育成を中核に据えた重点活動を設定した。その中で、確かな学力向上部の取組である中学校区3校連携事業の「家庭学習強調週間」の計画立案に自身も参画し、協働して活動に取り組んだ。事前に当校の研究主任と自身で内容を検討し、3校の研究主任会では「自己調整力」育成に向けた方策として「めあての設定と振り返りの実施」について自身が提案し、参

会者の賛同を得た。

実践を通して、多くの児童が、自分自身のこれまでの取組を振り返り、どんなことに取り組んだらよいかを自分で考えてめあてを設定することに繋がったと考えられる。このことから、家庭学習強調週間においても「自己調整力」の育成を中核にした取組の有効性が示唆された。今後は、日々行っている家庭学習や自主学習の取組など、確かな学力向上部が主になって行っている取組を見直し、児童の「自己調整力」の育成に向けた、継続的な取組の工夫を考えていくことが必要である。一方で、豊かな心の育成部の活動に対しては、自身の関与が弱く、担当職員に自己調整力の育成に関する考えがうまく伝わっていなかったという反省点も挙げられる。

6 自身が考える「自己調整力」で繋がる学校運営

(1) 意識調査から見える「自己調整力」を育む必要性

市の生活・学習意識調査から自身がこれまでの課題追究の中で見出してきた「自己調整力」育成の必要性は、児童のメディアコントロールの実態との関係に留まらず、学習への取り組み状況(宿題実施の有無)や友達との関わりに対する意識とも関係が深いことが子どもたちのアンケート結果からも示唆された。そのような点からも、今後3つのビジョン部活動の内容を考えていく中で「自己調整力」の育成を中核に教育活動を展開していくことが、それぞれの部が目指す児童像の実現に向けた方策のヒントになると共に、当校の児童の実態をもとにした資質・能力の育成に向けた取組になると考える。

(2) 健康ウィークの結果から考える今後の方向性

① メディアコントロールに向けた改善

メディア使用時間の目標については、今年度から全体の数値目標ではなく、個別のめあてを設定した。それは普段の自身の生活を振り返り、メディアとどのように付き合っていたら良いか考える必要があると考えたからである。今までのようにメディアを排除するのではなく、メディアをどう生かすか、どう使いこなすかを考えることこそが、これからの社会を生き抜いていかなければならない子どもたちには必要不可欠な力の育成に繋がると言える。

使うことが悪ではなく、コントロールできずに自分の生活習慣が乱れてしまうことに大きな問題

がある。健やかな体の育成部では、メディアコントロールを通して、「自己調整力」を子どもたちに身に付けるための方策を今後も考えていかなければならない。

② 職員の意識から見えた改善策

職員の意識調査から、今後の改善策を以下のように考える。

- ・年間を通した各ビジョン部活動の精選と目指す資質・能力の共有
- ・コミュニティスクール制度を生かした、中学校区内での地域と連携した取組への発展
- ・児童の主体的な取組を可能にする職員の意識改善と保護者との連携

職員の率直な声から、今後の健康ウィークの改善の方向性のヒントになるキーワードが多く見られた。これまでの取組を無駄にしないためにも、常に改善を図りながら子どもたちにとって意味のある活動を推進していく必要性を大いに感じた。

(3) 学校目標実現に向けた組織運営の在り方

今年度、当校の教育目標は「未来を創りだす子ども」と新たに設定された。これは、前年度の「五十嵐の教育を語る会」(小学校区教育ミーティング)において、学校評議員やPTA 役員、学校教職員が一緒になって熟考した当校の子どもたちに必要な資質・能力をもとに考えられている。また、そこには、これからの変化の激しい社会の中でも力強く生きていくことができる子どもたちを育てていこうという大きな願いが込められている。こうした背景を踏まえ、当校の校務分掌の中核として位置付けられているビジョン部活動の活性化が、学校目標実現に向けた組織運営に大きく関わると考える。また、「学校ビジョン」に示された教育目標と各ビジョン部が設定する目指す子ども像を形骸化させることなく、その実現に向けたビジョン部の取組の目標と方策を教職員が共有し、協働した取組にしていくことが重要となる。これらを具体化・行動化するために、ビジョン主任会の果たす役割は大きいととらえている。

(4) ビジョン主任会の在り方

昨年立ち上げたビジョン主任会は、学校運営活動において、有効に機能するためにどのような位置付けとして在るべきか、自身の実践を省察し、以下のようにとらえた。

- ・各ビジョン部の活動運営に関する悩みや問題点を共有し、改善策を話し合う場
- ・各部の活動における目指す資質・能力の具現に向けた方策検討の場
- ・各部の目指す姿と学校教育目標との繋がりを検

討する場

これまでの当校のビジョン部活動は、各部が各々目指す姿を設定し、その具現に向けて各活動を展開してきた。しかし、それらの活動は単発的であったり、散発的であったりしたため、何を目指した教育活動なのか、本当に目指したい子どもの姿は何なのか、その本質に迫ることができていなかったと感じる。よって、これまでの取組とは違い、各ビジョン部が同じ方向(目標)を目指した取組を展開できること、同じ資質・能力(自己調整力)を育むことを目的とした取組の一体化が図られていくことこそ大きなメリットとできると考えている。自身の一連の取組の中で、これまでビジョン主任にとって悩みの種となっていた各部の運営について、各部が協働できる内容と方法を生み出し、連携した取組を可能にするために、取組の見直しをもととする職員間の動きがあったことが、その根拠である。

7 おわりに

学校組織としての機能性を考えたときに、校長のリーダーシップの重要性はもとより、校長の考える教育ビジョンを具現するための組織内部の運営体制が問われる。本研究では健康ウィークにおける児童のメディアコントロールの定着を出発点に、自己調整力の育成を中核にした組織運営の在り方と、それを具現するためのビジョン主任会の在り方を追求するに至った。令和の学校運営において、教職員の協働性や同僚性は「チーム学校」に象徴される国の推進課題にもなっている。また、メディアコントロールへの取組は、コロナ禍での学校運営の課題として表出した、ICT 社会への加速化とともに、資質としての「自己調整力」の獲得と、保護者や地域との連携を必要とする喫緊の学校課題として、取り組むことが求められている。学校も家庭も地域も同じ方向を向いた取組の継続が五十嵐中学校区の子どもの未来に続く健やかな成長を実現することに繋がる。

「校長を中心としたチーム学校の一員として、同じ目標に向かって歩み続ける学校組織の在り方を、職員間で当事者意識をもって努めていく学校づくり」を自己指針とし、日々の教育活動の改善と向上にかかわっていききたい。